

楽曲についての無用のおしゃべり

「プロメテウスの創造物」は、ベートーベンが当時ヨーロッパで人気の高かったイタリア生まれのバレエ家サルヴァトーレ・ヴィカーノのために作曲した2幕のバレエ音楽です。1801年3月28日にウィーン宮廷劇場で初演され大好評を博しましたが、その脚本、原稿ともに残っていないので、バレエの内容は明らかではありません。

プロメテウスといえば、土と水で人類を創造した、ギリシア神話の巨人神ですが、神の国から火を盗んで人間に与えたためにゼウスの怒りにふれ、山上で鎖につながれ、毎日ワシに肝を食われる罰を受けたのです。ベートーベンは、このプロメテウスを一人の「英雄」として考え、人間の犠牲的精神の永遠的な発展を描こうとしたのではないかと推測されます。

今夜演奏します序曲は、アダージョの序奏とアレグロ・コン・プリオの主部から成っています。

「小組曲」は、1889年、ドビュッシー27歳のときに作曲されました。ローマ大賞を得て、イタリアに留学しながら、期限の満了を待ちきれずにパリに戻ってきて2年目、そのころドビュッシーは、ワーグナーの楽劇に対するかつての心酔からようやくめざめ、彼本来の微妙で洗練された感性から音楽を探り出そうとしていたのです。しかしながら、四手用のピアノ曲として作曲されたこの「小組曲」では、マスナー風な甘美さと抒情性に満ちていて、後年「印象主義音楽」と呼ばれる独自の作風は、まだ技法的にも精神的にも確立されていません。そしてこの後、有名な「月の光」を含む「ベルガマスク組曲」などを経て、次第に印象主義的なピアノ音楽が形を整えていくのです。

なお、管弦楽への編曲は、アンリ・ビュッセルの手になるものです。

交響曲第104番は、1794年2月から1795年8月までの第2回ロンドン滞在中に作曲と初演がなされた6曲の「第2期ザロモン交響曲」の最後の、そして107曲(!)を数えるハイドンの交響曲の最後を飾る交響曲です。その自筆譜の表紙には、ハイドンの手で「私がいギリスで作曲した12番目の交響曲」と英語で書かれ、第1ページには「ロンドン1795年」とあります。初演は、1795年5月4日に、キングス・シアターで開かれたハイドン自身の慈善演奏会で、ハイドンの指揮でなされました。

さすがにハイドン最後の交響曲だけあって、この分野での彼の歩みのクライマックスを築いており、冒頭の劇的で力強い動機から、終楽章の息をもつかせぬコーダまで、緻密な構成をもち、細部まで充実した作品となっています。この曲などを聞くと、モーツァルトより、むしろベートーベンへとつづくものを感じます。

なお「ロンドン」あるいは「ザロモン」という名称は、19世紀以後に付けられたもので、たんに作曲地あるいは作品の依頼者を記念する以上の意味はもっていません。